

平成4年9月8日発行

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆう と 櫻貝 と
海光る わが 故里

第 6 5 号

内容 鵠生園日記

田中まさ子

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保2年・1801）で、“くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。

鶴生園日記

田 中 まさ子

趣旨

「この記録は、八十歳になろうという老婦人の養護老人ホームでの、昼間の生活記録で、その体験が詩情豊かに綴られています。この平成4年の記録が、あと10年先、20年先と幾多の歳月を経た後において、読み返えされたとき、この当時の老人の置かれた社会事情が判り、かつ平成初期の世情をも推察できると思い、語る会の機関紙「鶴沼」の紙面にのこすものです。」

本文

年があらたまり、平成4年となり、この園でも新春の儀式をし、私どもも職員さん、ボランティアの皆さんと”おとそ”を頂いて祝いました。

年毎に身辺ゆかりのある方とお別れがあり、この園で親しむ方々とはみな家族と考えられ、ことに若い職員さんを「子」、「嫁」、「孫」と呼ぶことにしてます。

遠慮のないことが本当の幸せと思います。この園のなかにいる限り平和です。この閑静な住宅地に、3日、雪が降り久方ぶりに故里を想い眺めていましたら、明け方地震があり、この驚きのさめないうちに、近くに殺人という嫌な事件が起きて又びっくりでした。昔とちがってテレビがあり、年寄りも新聞を読まなくても世間のことを知り幸せと考えていましたが、いやな事件は知っても「ボケよけ」にもなりません。

さて、この園の家族の人達を書きましょう。

私に一番先に声をかけてくださった堺さん、この方は画家でいつもスケッチブックを持っていられ描いておられます。私は多年の希いである肖像画をぜひとお願いしました。堺さんは快く描いてくださいました。その出来上がりを見て私は満足しました。私の体調のよい時をえらんで描いて頂いたので、本当に見事な仕上がりです。よい絵が残り家族も関心しました。お顔は覚えてもお名前を知らない方が多く、いつも英会話で話す方、女学校の英語の先生をしてらした。古典文学を空らんじておられる方。故郷の自慢話やしきたりを話す熊本や山口、鹿児島の方々、いつも話す順序は同じで一方通行ではあるが几帳面に話される。本当に感心するのです。この園では、自分以外はみな師であります。

この新しい年の始めに堺さんは、富士山の絵を描いて私にくださいました。富士山、いつも見る気品の高い鶴沼の富士山です。私は嬉しく毎日この絵を身近に眺めてその気品にうたれます。富士山の絵は幼稚園の子どもも描きますが、山の気品を出すことの難しさを、よく黒崎義介先生が私共に話して下さったことを思い出します。本当に私は師に恵まれました。鶴沼に住んだからです。

2月12日の新聞にモスクワの自宅で岡田嘉子死去、89歳とありました。ソ連国境を越え亡命したのは昭和13年、自分で選んだ道だったのにと私は思わず涙しました。さて、この年も自分なりに思ったこと見たことを書いてゆくつもりです。

いま私は、公民館と鶴生園が勉強の場です。誠にあり難いことで今年も体調を崩さぬよう気を付けて頑張れや！と自分に言って聞かせます。

私がこの園に入った当時、佐々木さんという職員がおられ、その方はひなに稀な美男子です。「これは楽しいわい」と私は思いました。だって紫式部も「光源氏」を楽しんで書いたにちがいません。その佐々木さんが見えないと思ったら、病気になり入院され、この仕事は無理とのことで止められました。驚きましたが、よく考えたら、弱くなって動けない老人の体重をいつも支えて勤めねばなりません。心身共大変きびしい仕事です。心労の思い日々だったので しょう。「佐々木さんよ。私位の美人は薄命ということはないが、美男子短命とはものも本にも聞いたことがないよ。坊やもまだ小さい。がんばれや」と言伝てをしておきました。身体は大切です。これは理想でしょうが、サービスを受ける人も、職員さんボランティアさんも共に楽しく残る余生を生きて行けたらと思います。昭和を生きて色々なことがありました。この辺で穏やかに誠実に送りたいと思います。

訂正をお願いします。

機関紙第63号に掲載された「黙って見つめて」の2ページ6行目”やすらぎ荘”とあるのは、”湘南なぎさ荘”の誤りです。ご訂正下さい。 文責吉田。

鶴生園日記(その2)

田 中 まさ子

二月十九日

今年は暖かな春です。鶴生園の庭のすみに「ふきのとう」を見つけました。淡い緑がさわやかです。今日は誕生会で、江の島のお友達ということで森野さんが美声で「江の島エレジー」を歌って下さった。古い歌ですが、遠い日のできごとを偲びました。

二月二十六日

園では食後のひととき、2・26事件(昭和12年、1936)を話し合いました。この事件を語る人の熱心さは 変わらないと思いました。みな古い昔のことですが、はっきりと覚えています。

今年は早々と「ひな祭り」をして、和らいで楽しみました。どの家も桃の花は一ぱい咲いて椿も咲いて、鶴沼の春はらんまんです。この園のまわりには古い家があり、四季それぞれに散歩しながら、広い庭を眺められて本当に幸せです。潮騒もやさしく聞こえます。

三月十八日

時ならぬ春雪に家の庭も町も包まれて久方ぶりに雪の風情を楽しみました。園の迎えが来たので「今日は江の島の雪景色が見られるだろう」と期待したのに、アッと言う間に雪は消えてしまいました。今日は彼岸の入りなので、園では「おはぎ」を作りました。春は「ぼたもち」と言うのです。秋は「おはぎ」と言って家の仏さまにも近所の仏さまにも配って近隣の「つきあい」に人情はよきものがありました。今は彼岸の意義さえも知る人も少ないようです。

三月十七日

最近になって、私達の間で口には出さないが、新聞やテレビで「安楽死」ということに知らず知らずの間に注意が向きます。そんな時に新聞で見ました。日医が尊厳死容認とか患者の意思尊重、自然死法制定求める。患者本人の意志また利益、幸福の観点から「死ぬ権利」という。だから、「安楽死」の立法化は否定とのこと。私は一時しゅんとなりました。三月は色々「お別れ」月です。卒業、転勤、かりそめの別れさえつらいものです。

私は十二、三年「のら猫」と起居を共にして、そののら猫は「ボロ」と名前を付けて、ずい分楽しい日を送りました。ある日ボロが私の家から居なくなりました。私は毎日エサを作り待ってましたが、ボロは帰ってきませんでした。私の身体が弱ったのをボロは解ったのでしょうか。ボロは何処かに死に場所を見つけたのだでしょうと思いながらも、今日も待ってます。弟の戦死。これも四十何年待っています。誰も死に場所も、骨も見ることがないので。公報と只白木の箱に石が入れてあった「遺骨」でした。私は長い間玄関の「カギ」をかけずに帰るのを待ちました。・・・遺族の思いはみな同じです。

「安楽死」、本人はよいでしょう。苦しみたくないのは人間みな同じです。だが、遺族はいつまでも切ないものです。今日はつくづく考えさせられました。

人間ばかりではありません。動物も死を知っているのですね。つらい切ない思いです。老いと言い、死と言うことは、何時か自分の上にもくるものですが、みな知っているものですが、切ないものです。

四月十五日

今年は三月から菜種梅雨でよく雨が降る。朝、園に着いたら、誰かが前庭で、スコップで竹の子を掘っていた。厨房の職員の遠藤さんだった。太い竹の子がよく生えていた。一生懸命に堀りあげて、今日の食事には、竹の子のさしみが一品加わった。庭すみのフキも四季の香りを楽しく味わった。こんな自然が何よりも嬉しいものだ。

四月二十二日

今日は毎年する体力測定の日、身長、体重、握力等、前回よりやゝよかった。岩田さんがカセットテープを持って来て、かけてくださる。早速聞く。・・・ソプラノ歌手、高橋久子さん。伴奏、岩田礼子さん。長塚節の「鐵の如し」の四首、石川啄木の「初恋」、磯部俣の「松の花」。爽やかなソプラノ、あざやかなピアノの音に、久方ぶりに音楽会のステージを眼のあたりに見た思いで、よい曲、よい歌声に幸せなひとときであった。

雨の中、桜もツツジ、ぼけ、花みずきも散り藤の花房を見る晩春となった。

五月一日

連休に混まない間にと、大庭の募参りをする。若葉でむせるような静かさだった。大庭はよい所になった。世の中は、国際貢献、自衛隊の海外派遣、PKO協力維持法案、とかま

びすしい。憲法四十五年の月日を思う。昭和の初めの頃、私の家の近所に宝生流の家元宝生九郎が住まっておられ、明治の話をよくしてくれた。三台目竹本綾之助女義太夫死去のこと、新聞で知った。八十四歳、明治時代盛んだった娘義太夫の大スターだった。それも私の少女時代のこと。遠い遠い日のことだ。

五月三日

今日新聞で、ディトリッヒがパリで死去。90歳とあった。大正時代から大スター映画女優でその美しさ優雅さは今でも眼に焼きついている。”あゝ”太いためいきが出た。美しいものもみないつかは消えてしまうものだ。

視力が弱ったが一生懸命によく見てまた書いておきたいと考える。

これをとりあげて下さる「会」の方々に心から感謝申し上げます。

おわり。

鶴生園日記（その3）

田 中 まさ子

五月十日

細川護熙氏新党宣言（自由社会連合結党）とあるのに、一寸驚いて眼をひいた。夫人が鶴沼の人だからでもあるが。

六月十二日

P K O 法案参議院通過、牛歩戦術を見た。6月5日にこの法案は、未明に会議で可決された。衆院は徹夜であったとのこと。なんだか嫌な感じでいたら、この日にささやかなことがあった。藤山一郎さんが、国民栄誉賞を受けられた。歯切れのよい歌を、60年以上歌い続けた。その明るさは、暗い昭和の歴史の中で有難いことだった。

六月十七日

私が安心したのは、戦略核の三分の一に削減。米・ロ首脳大幅核軍縮に合意とある。大型 I C B M は全廃とのこと。まだいろいろあるが、どうかよい方向に向かってほしい。

六月二十八日

今日は晴れた。梅雨空で久しく訪ねなかった近所の小貫さんを訪ねた。

花が咲き乱れている庭を通り、「小貫さん、今日は」と声をかけた。「ハイ」と元気な声で小貫さんは背をのばして、奥さんと部屋にいた。「田中さん、おあがりなさいよ」と言う。私はしばらく会わない間に、よくこんなに治ったものだと思おどろきだった。さあ、唄いましょうと小唄を唄い出した。はっきりと本格的に「さんさしぐれ」、「目出ためでの若松さまよ」と二曲唄って、今度は「三味線を持って来てよ」と言われる。本当に元の通りに唄えたのだ。小貫さんが倒れた時は、言葉も体も動かなかったのに、これはお家の努力もさりながら、鶴生園のサービスがよかったのだと思った。それは、近所の顔なじみの者に会えたり、自分の住いから通えたことにあると思った。私もこの園でサービスを受けるのは楽しい。長い間住んだ土地で親しい人が一杯いるから。

初めて園へ来た日、一番先に声をかけてくれたのは、浅沼さんだった。「あらよし樹ちゃんのお母さん」と笑顔で手をにぎってそれから話は尽きなかった。鶴沼小学校の頃、子どもの先生、お母さん方の消息やら、遠足に付き添ったなど。それからしばらくディサー

ビスと一緒に受けて会う日を楽しみにしていた。いつの間にやら浅沼さんは園に来なくなった。どうしたのかと心配して、近くの人に聞いたら、入院されたとのことで、また姿を見せると思って待っていたら、最近人伝に聞いたのは、もうまるっきりボケられて仕舞って、毎日のように家へ帰りたい帰りたいと言って、回りをこまらせているとのこと。聞いて、ああ無理もないなあと思った。家族と友人と遠く離れ、入院なんて誰も居心地のよいものではない。あのあざやかな記憶をたどって話した浅沼さん、もう一度もとに返せないものか。自分の住いであれば、身体が弱っても楽しい日もある。落ち着きの不安はボケを早く呼ぶような気がする。

園で話すとボケなんて思えないほど、みな楽しそうに笑って話す。たとえ同じことを何回話されても、笑顔で受けてあげる友情と親切は大切である。特に、職員さんも、ボランティアさんもよく親切に見てくださり、感謝である。私の考えていることだが、みなさんの善意のみに縋っていてよいものか。自分のために自分で出来ることを見出すことがその人の幸福ではあるまいか。たとえ、障害の重い軽いはあったにせよ、”自分はこんなこと位は出来る”という自信を持つことは自分の幸福と思う。みんな同じ事が出来るのではないし、職員さんも手を貸してあげた方が早いと思われるが、その人の出来ることは見守ってあげたらと、これは意地悪ではない。デイサービスの大切さは、年をとってみて解る大事な親切だと思う。

おわり。

「鵠沼」第65号
平成4年9月8日発行

鵠生園日記 田中まさ子

ご注意：本紙（機関紙）の文
章を引用される方は、必ず
出典を明記して下さい。

編集・発行 鵠沼を語る会

鵠 沼 公 民 館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34

〔注〕文中、田中直樹とは、その後結婚されたまさ子さんのご夫君です。